

2009年(平成21年)3月31日号



ひと

“炭”活用の可能性を探る

住宅向け調湿木炭事業を
展開する出雲土建社長

石飛 裕司さん

「炭に魅せられた」と
いう。建築廃木材を使った調
温木炭「炭八」の事業を
始めたのは8年ほど前。

公共工事が縮小する中、
建設業の落ち込みをカバー
する新規事業を模索し
ていた。

「建設資材リサイクル
法施行を機に、木廃材の
リサイクル需要は高まる
と見えた。また、日本は多

いので、調湿機能を持
つ炭のニーズはあるは
ず。快適な住環境のため
には自然素材の持つ調湿
力が欠かせない」。通算
200日かけて全国の炭
化工場などを視察して回
った。何人の専門家の
話を聞き、絶対に受け入
れられるものになると確
信した。

原料は、地域の古い家
屋から出た木廃材（針葉

1991年、社長に就任
した。

「最近になってやっと
軌道に乗ってきた」と素
直に喜ぶ。02年には86
0万円程だった木炭の売
上は、08年には1億28
00万円まで伸びた。何
度も危機に直面したが、
「本物を追求し、顧客に
喜んでもらうことが使
命」と考え、乗り越えて
きた。

興味を持ったら、その
分野の本を10~20冊一気
に購入して勉強する。そ
して第一人者に話を聞き
に行く。飛び込みでもい
く。「一流の人のところ
へ行くことが、結局は早
道になる」。抜群の行動
力だ。

「炭には、まだ知られ
ていない効果が眠ってい
ると思う」。炭への探求
心は強まるばかりだ。

見えるように、島根大学
医学部・総合理工学部、
56歳。（井川 弘子）